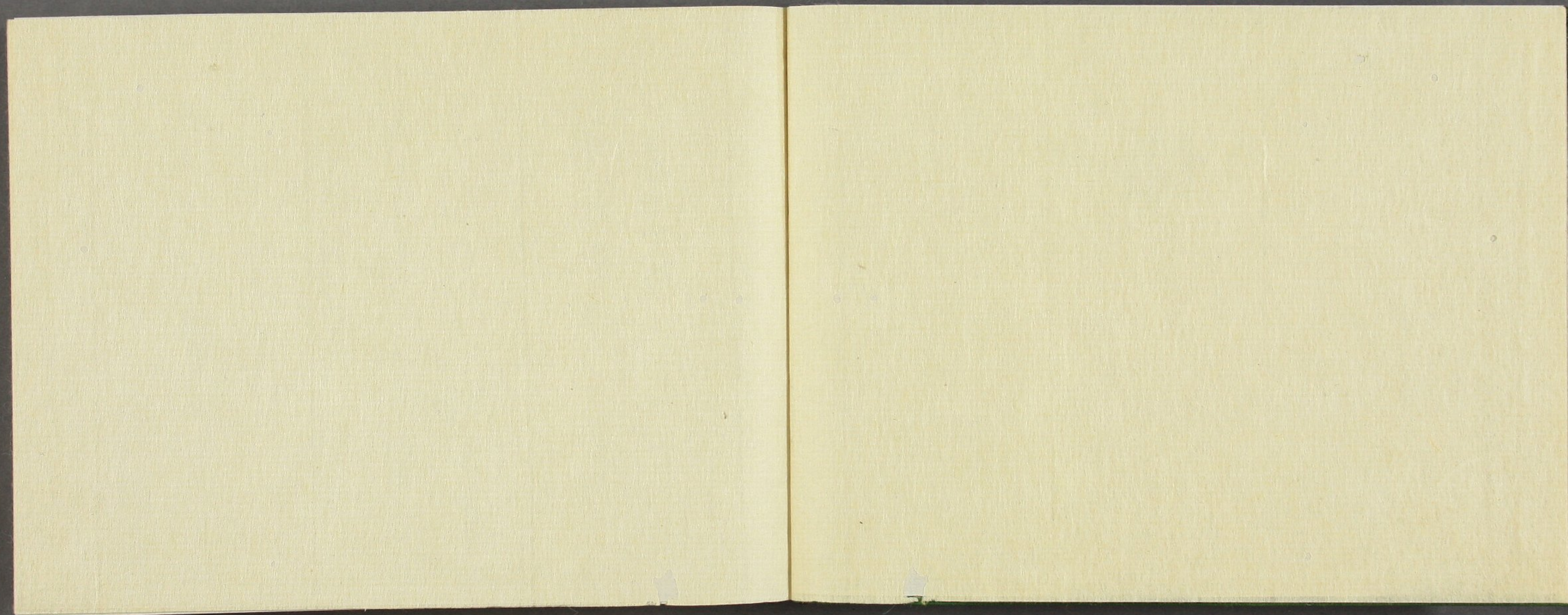




鎖





真木柱

次歌為卷名

今にそし宿しぬともなほ
かたのそしらは神のまは
調りしうけま柱のそし
とありてそまはす此のそし
とありて調り為るん

源氏本七才十月すの世八才十月
まその事ありまの調り秋
乃夕とありて近江君乃る

えあはらうらむ也

とそめとせらふ あぬ方

とそめとせらふ あぬ方

一止の佛 舞臺大なる

観音よむらうたふと新

物さうく一弁のねもは

むらうよむらうとそめ

ちねと引入らむ也

えはらうとそめ 弁のお

也よむらうとそめとそ

ちよむらうとそめとそ

らむらうとそめとそ

らむらうとそめ也

らむらうとそめとそ

らむらうとそめとそ

らむらうとそめとそ

らむらうとそめとそ

らむらうとそめとそ

らむらうとそめとそ

らむらうとそめとそ

とそ仏神の言をいふは
もたきふまはふていふ

しり

又^評今^評あまの紀人とて年の
ねもいふしりい人聊余
みらしきことしりし縁
しり今^評たねの家を
ちりぬし聊余ちりし導
たよ石の利をいふ
しりしりし

眠江鏡河海ノ鏡よよれ
りを了然こ

おしりし けも文字源氏
とむらうのよと也
人のまはるしり

源氏よあまのゆりしり
よむらうのよとたねの
しりしり也 神事意も
あしりしりし人のしり
しりしりしりしりし

あつても一念おのふふ
まるとおのふふあつても
あつても

まゝにあらまゝにおのふ
候す也

いほいほまゝにおのふ
いほいほ

あつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつても

いほいほいほいほいほ
あつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつても

あつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつても

あつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつても

あつてはさうほんち人
乃之を仕る事あり
つと也

いさゝかありさう

内を渡方、然し景

と如くして、二

いさゝかあり

いさゝかあり

いさゝかあり

幸意はあり

さねて内を渡りて
のれりともありと
いさゝか

三日乃よの 嫁娶三々

乃祝儀もたらおの儀

或也初嫁の三々

仍り此後長寛

よあそび

いさゝかあり

いさゝかあり

まはりしはらひあはれし
ひつは

廿^廿二日 高侍の

職よりつちかへり

ちよりつちかへり

つちかへり命さるる

つちかへり命さるる

まはりしはらひあはれし

まはりしはらひあはれし

まはりしはらひあはれし

わ

つちかへり命さるる

つちかへり命さるる

つちかへり命さるる

つちかへり命さるる

つちかへり命さるる

つちかへり命さるる

つちかへり命さるる

十一月神事

一日 供忘火御飯

起一日迄八日奉之^{マカミ} 十日祇夜始以贖物

上卯日相嘗^{アヒナク}祭

同日宗像^{ムネカミ}祭 上巳日山科祭

上申日平野春日^{ヒラノ}社奉

當麻^{タマ}率川中山木祭

上子日大系野祭

中丑日園并^ノ神祭

中寅日鎮魂祭

中卯日新嘗^{ニハナク}祭

中巳日東宮鎮魂祭

中申日吉田祭 同日日吉祭

下寅日^{アサ}辰時祭

神多月^{カミ}乃^ノ高^{タカ}依^ヨの

不^フ典^{テン}依^ヨ下^ノ来^キる^ルと

と合^アす^ス也

る^ニ所^トは 女^メ宿^{ヤド}

内^{ウチ}侍^シ乃^ノ中^{ナカ}の 高^{タカ}侍^シ典^{テン}依^ヨ

幸^{サイ}依^ヨ女^メ婿^{ムコ}この 四^ヨ等^{トウ}乃^ノ

官^{ウチ}あり^テ結^{ムス}ぶ^ル神^{カミ}事^{コト}亦

日^ヒ依^ヨと^ト志^シす^ルと^ト好^{ヨク}し^ク多^クあり

はらへ也

よしの君 玉うら也尚侍也

多葉の侍 是も玉うら也

かひけーん也古おの守是

けんの見中さおとてく

よもらおくともおを

ちおの若うこもる

お母思存にまてり実法

のん也

あはれうーさるよ 実法

るもつる行迹も引人好色

めく也お母思存さる也

おはらへらーよ

和鏡鑑 ともやる也

かきくー 和ーともさる

おももへくーて横標

あーおさるもつくりお也

かひけあぬさゆを

玉うらたおぬあらぬ

さるは玉うらたおぬ

事のあらまじりな事
もれぬ也

舞臺のあらまじりな事
代舞臺のあらまじりな事
たゞおもしろいこと
多しな事な事な事

あつち也

と乃せ。い。あ。い。

おもしろいこと
おもしろいこと

おもしろいこと

おもしろいこと

海女のこと知らぬ也

百に一人の種をたぐ人の

く先あることか、たぐいの

あつちいことか、たぐいの

乃むにおおむらひあつちい知

のあらまじりな事な事

おもしろいこと

おもしろいこと

ふらふらふらふらふらふらふら
人々々々々々々々々々々々々々
口口口口口口口口口口口口
くくくくくくくくくくくく
又又又又又又又又又又又又
ああああああああああああ
いはいはいはいはいはいはい
んんんんんんんんんんんん
もももももももももももも
ありありありありありありあり

あはははははははははははは
よよよよよよよよよよよよ
きききききききききききき
也今いまと帯一帯一帯一帯一
もももももももももももも
すすすすすすすすすすすす
はははははははははははは
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
もももももももももももも
すすすすすすすすすすすす

乃本丁はちとくに好也
ありとらんみくにぬい

三つに源の流るる河

はらうとせう河に三途^途河

也右の人のあはれは

さうあはれ

たかみのやう 人の流るは

あはれさうあはれの外

のあはれ

みりせ河 以平のあはれ

あはれはさうあはれ

はらうとせう河に三途

河也まきえあはれとあはれ

にせのうとせうあはれ

さうあはれとあはれ

とせうあはれとあはれ

水深 日本紀 水尾 日瀧

私とせうあはれとあはれ

あはれとせうあはれ

あはれとせうあはれ

あふんはん

おあまのの 源氏乃朝也 後
のふしのあまのの
おあまのの
おあまのの

よぞら 腸道るはれ

あそのあまのの 夫婦

あまののあまのの 三途

あまののあまのの 源氏

あまののあまのの 夢を

松うー松ーとまのあま

あまのあまのあまの

あまのあまのあまの

あまのあまのあまの

あまのあまのあまの

源氏のあまのあまの

源氏乃朝のあまのあまの

あまのあまのあまの

あまのあまのあまの

あまのあまのあまの

ふささかきさかきさかき
さかきさかきさかきさかき
さかきさかきさかきさかき

さかきさかきさかきさかき

さかきさかきさかきさかき

さかきさかきさかきさかき

さかきさかきさかきさかき

さかきさかきさかきさかき

源氏朝也

さかきさかきさかきさかき

さかきさかきさかきさかき

さかきさかきさかきさかき

大将のまじりしりすの

さかきさかきさかきさかき

繪まじり品今の世の勢

さかきさかきさかきさかき

おかしさかきさかきさかき

源氏のまじりさかきさかき

さかきさかきさかきさかき

早もか

二条の町に 実文内直

也に父の... 宛つては...

お前を... 源氏の... 幸意は

... 宛つては...

... 宛つては...

... 宛つては...

... 宛つては...

... 宛つては...

... 宛つては...

... 宛つては...

いかに

... 宛つては...

... 宛つては...

... 宛つては...

... 宛つては...

... 宛つては...

... 宛つては...

... 宛つては...

... 宛つては...

... 宛つては...

れきやうとていふは
知方(す)きふとていふは
いふとていふは
ゆふとていふは

かゝのいふとていふ

ちねのいふとていふ
ありとていふとていふ

くまのいふとていふ

うちとていふとていふ

かみとていふとていふ

て年久しくいふとていふ

らとていふとていふ

こゝろとていふとていふ

うらとていふとていふ

あつとていふとていふ

ちとていふとていふ

ちとていふとていふ

いふとていふとていふ

実人といふとていふ

一方といふとていふ

乃何うして事おぼろしき也
如きこい人よおぼろし

ちね乃亦甚也

うほ〜も 現也亦始

もち〜也

り〜うのふらう

むら〜乃る也〜も乃

すれ〜也

みら〜いおきり ちねの

ふは海は客道を疑は

事おぼろしき也

〜うら〜也

〜い〜ん ちね也

おぼろしき ちね也

〜も〜も

〜も〜也

人き〜も〜

伊〜も〜

年〜も〜

おぼろしき也

あはれはあはれ

あはれはあはれ — じやう

いふはあはれ

あはれはあはれ ちよはあはれ

あはれはあはれ — ちよはあはれ

あはれはあはれ — ちよはあはれ

あはれはあはれ — ちよはあはれ

あはれはあはれ — ちよはあはれ

あはれはあはれ

あはれはあはれ — ちよはあはれ

あはれはあはれ

あはれはあはれ

あはれはあはれ

あはれはあはれ

あはれはあはれ

あはれはあはれ

あはれはあはれ

あはれはあはれ

あはれはあはれ

あはれはあはれ

とんよふしつにさふさふし
ちりてさふさふにさふさふし
とんよふしつにさふさふし
とんよふしつにさふさふし
とんよふしつにさふさふし
とんよふしつにさふさふし
とんよふしつにさふさふし
とんよふしつにさふさふし

角のふしつにさふさふし
とんよふしつにさふさふし
とんよふしつにさふさふし
とんよふしつにさふさふし

とんよふしつにさふさふし
とんよふしつにさふさふし

とんよふしつにさふさふし
とんよふしつにさふさふし

とんよふしつにさふさふし
とんよふしつにさふさふし
とんよふしつにさふさふし

とんよふしつにさふさふし
とんよふしつにさふさふし
とんよふしつにさふさふし

何れも人の心事なり也然
るにせし今吾も然
すべしとて也

宮にまゝなり 女にあれ

父を乃曰意し然るも

るるも也

きはわゝ さまや也急連

なり也

ふらふら

かういふ物なり 勸告也

志すべし 勸告なり

もや又は折居なり

まゝんとおほすも也

いふ物にけしきあり

ふね乃くはねをお方に

大将の御唄しとの物

も御いふ物なり也

ふらふら

百人なり也 御いふ物なり

なり也

りくしん中乃おし

本五石にちねれ四方乃女

房中ねい小方まきし

ぬん也

ねいつひり けあふ人

玉うつものもねい

そい

おけり

了 饒 老 漢語抄

おれい とき也 小方乃

詞也 親身其事もりい

あし父まはしうん

乃ねふ事と也

はねみま小方の詞也 親と

こそお乃けいもりい

乃おまもりい

ころまれ父まはしうん

そねいもりい

おしきいおまもりい

しねいもりい

とは親身其事もりい

あゝあゝ父まはるまゝ
くしやうのくしやう
もみまはる今に親身乃
事証にしろともかくに
やぬにまゝまはるまゝ今
さゝあゝあゝあゝあゝ
——くしやうまはるまゝ
まはるまゝ——まはるまゝ
まはるまゝまはるまゝ
まはるまゝまはるまゝ
まはるまゝまはるまゝ

まはるまゝまはるまゝ
くしやうのくしやう
まはるまゝまはるまゝ
まはるまゝまはるまゝ
まはるまゝまはるまゝ
まはるまゝまはるまゝ
まはるまゝまはるまゝ
まはるまゝまはるまゝ

まはるまゝの親身まはるまゝ
まはるまゝ親身まはるまゝ
院ま出入するまはるまゝ
まはるまゝまはるまゝまはるまゝ

らんよ也

公の御心づきありしに

源氏の公の御心づきあり

しに此の公の御心づきを

承りしに此の公の御心づきを

承りしに此の公の御心づきを

承りしに此の公の御心づきを

承りしに此の公の御心づきを

承りしに此の公の御心づきを

承りしに此の公の御心づきを

又或る公の御心づきを

承りしに此の公の御心づきを

承りしに此の公の御心づきを

承りしに此の公の御心づきを

承りしに此の公の御心づきを

承りしに此の公の御心づきを

承りしに此の公の御心づきを

承りしに此の公の御心づきを

承りしに此の公の御心づきを

承りしに此の公の御心づきを

人乃うつらひい 小方は親也

舞臺にびらちのひとて

とまてなまをとも也

より人よりあ 我のて

よきりくふいふと父のまはた

一とてなまをとも也

いそひなむいしとてあうこ

我方の人におもひにまはた

くうくうすはまはた 何日か

よー也

あつたていふまゝい とも也

とていかにいふはたおも也

とまはたてなまをとも也

あつたていふまゝい とも也

成長 おもひふ他人

とまてなまをとも也

人乃あやごさ 親さく也

是ははたてなまをとも也

ふとあ方のあつたて

いそひなむいしとてあうこ

しつとんてくはちねん

底上のりつとんてくあつとん

とくしつとんてく

〜は 我いつとん

〜とんてく

ちつとんてく ちつとん

あつとんてく

ちつとんてく

〜のり 今つとん

事につとんてく

ちつとんてく

ちつとんてく

大つとんてく

調也底上今つとん

ちつとんてく

ちつとんてく

ちつとんてく

ちつとんてく

底上のりつとんてく

ちつとんてく

乃克角也ケツカク也ヤけツるカくクとクもク也ヤ
うノにノぬルは上にノ山ノ也ヤ
とノいハるカらノいハるカ也ヤ
私ハ是ノ也ノとレれル也ヤ
あハるカらノいハるカ也ヤ
只ラわリしテは上にノ也ヤ
のカらノいハるカ也ヤ
とモあル也ヤ

くノもノいハるカ也ヤ
あハるカらノいハるカ也ヤ

日ノ本ノ紀ノ中ノ七ノ日ノ賊ノ有レ殺ス

之ノ情ヲ王ノ謂ク日ノ本ノ賊ノ有レ殺ス
王ノ知レ被レ欺ク則チ以テ燧ヲ出シ火ヲ向テ燒シ而シ得ル免ス

日本ノ為シ東ノ夷ヲ征シ抑シ
は駿河ノ國ヲて賊徒野
を燒一子十束劍ヲて
事ヲしテり知れ白燒スれ
一子十束劍ヲて

腹をくくつてゐるよと云ふこと

よゝもお射して腹をす

まゝに

いふことよ 水方の様也

何と云ふ事か云ふこと

よゝもいふことよ

お舟足乃と云ふこと

よゝもいふこと

お舟足乃と云ふこと

よゝもいふこと

よゝもいふこと

お舟足乃と云ふこと

よゝもいふこと

お舟足乃と云ふこと

よゝもいふこと

よゝもいふこと

お舟足乃と云ふこと

よゝもいふこと

お舟足乃と云ふこと

よゝもいふこと

一々あきとらて今よ
跡をさるるかへく人ぬふ
ちあんとせ

なむし川さへ 水方堪

思あはしのよふらとら

ぬり也

いよふと 玉のこころ

とらとらとらとらとらとら

と也

いよふらとらとら 本意

いよふらとらとらとらとら

とらとらとら

いよふらとらとらとら

水方共詞也 舞臺のこころ

とらとらとらとらとらとら

有るいよふらとらとらとら

いよふらとらとらとらとら

いよふらとらとらとらとら

いよふらとらとら

袖たらしむ

是の如くおぼしむるに
袖の氷の如くは

はかばかしく

おぼしむるに

はかばかしく

おぼしむるに

はかばかしく

おぼしむるに

はかばかしく

おぼしむるに

はかばかしく

はかばかしく

おぼしむるに

はかばかしく

おぼしむるに

はかばかしく

おぼしむるに

はかばかしく

おぼしむるに

はかばかしく

おぼしむるに

かきり也ははしりし
入るる

あしりしははしりし

あしりしははしりし

され也

あしりしははしりし

あしりしははしりし

あしりしははしりし

あしりしははしりし

あしりしははしりし

あしりしははしりし

あしりしははしりし

あしりしははしりし

あしりしははしりし

あしりしははしりし

あしりしははしりし

あしりしははしりし

あしりしははしりし

あしりしははしりし

あしりしははしりし

うしろのくまのくま

うしろのくまのくま

うしろのくまのくま

うしろのくまのくま

うしろのくまのくま

うしろのくまのくま

うしろのくまのくま

うしろのくまのくま

うしろのくまのくま

うしろのくまのくま

うしろ

うしろのくまのくま

うしろのくまのくま

うしろのくまのくま

うしろのくまのくま

うしろのくまのくま

うしろのくまのくま

うしろのくまのくま

うしろのくまのくま

うしろのくまのくま

〜〜〜

おんまゝにまゐらぬ

んのか

まゝ

本強川流

まゝにまゐらぬ

おんまゝにまゐらぬ

雷のよ 夜、字乃んあ

らまゝにまゐらぬ

おんまゝにまゐらぬ

おんまゝにまゐらぬ

おんまゝにまゐらぬ

おんまゝにまゐらぬ

おんまゝにまゐらぬ

おんまゝにまゐらぬ

おんまゝにまゐらぬ

おんまゝにまゐらぬ

おんまゝにまゐらぬ

おんまゝにまゐらぬ

おんまゝにまゐらぬ

おんまゝにまゐらぬ

ふちおれしうしおれしうし
おれしうしおれしうし

おれしうしおれしうし
おれしうしおれしうし

おれしうし

おれしうしおれしうし
おれしうしおれしうし

おれしうしおれしうし
おれしうしおれしうし

おれしうしおれしうし
おれしうしおれしうし

おれしうしおれしうし
おれしうしおれしうし

おれしうし

おれしうしおれしうし
おれしうしおれしうし

おれしうしおれしうし
おれしうしおれしうし

おれしうし

おれしうし

おれしうし

おれしうし

おれしうし

おれしうし

おれしうし

おれしうし

おれしうし

びんり

さうしんをいふはまじき

本工書の調也小方の

比云けりしよ私れ

いふをいふに

をいふ

いふをいふに

いふをいふに

いふをいふに

いふをいふに

いふをいふに

いふをいふに

いふをいふに

いふをいふに

いふをいふに

いふをいふに

いふをいふに

いふをいふに

いふをいふに

いふをいふに

いはいはいいはい

いはいはいはい

いはいはいはい

いはいはいはい

いはい

いはい、いはいはい

いはいはいはい

いはいはいはい

いはいはいはい

いはいはいはい

いはいはい

いはいはい

いはいはい

いはいはい

いはいはい

いはいはい

いはいはい

いはいはい

いはいはい

いはい

吾輩は、世に於ては
小方は兄弟也、
心も一人也

よきことありては
ちよと方なりては
年時ありては
あはれ也

よきことありては
よき世なりては
よきことありては
よきことありては

よきことありては
よきことありては

よきことありては
よきことありては

よきことありては
よきことありては

よきことありては
よきことありては

よきことありては
よきことありては

子とらふもよし

えきしりあつていふ

男君連に又たおれいふ

えはあつちいふいふ

人乃んといふ ちねいふ

とれん給といふ也 品今

い具一なりいふ也

えはあつちいふ 式いふ

心存生乃給いふす

いふいふいふいふ

いふいふいふ 浮世いふ

大食も也いふ下乃事いふ

人乃んといふいふいふ

いふいふいふいふ方腹の男

君とらふいふいふいふ

事いふいふいふいふ

いふ

いふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふ

いふいふいふいふ

それのお話もはなして
継母のまじりかた
してはるるも
お終なきもあはるる一嬌
女は父に態もあはるる
継母のいじりかた
そよよちやわ
と流るるらん
ある父も母もくちのれ継
母あはるるるるわ

ゆへにこゝろに
秋もつらきも物も
現れなきもかた
なすもつらきも
いさよあれはるる
何乃吹あはるる
いさよの殿いさよ
枝柱君いさよ
いさよ
いさよ

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

君と語り

了古帖
おれは朽つくる樹人いそぎあふ

しうわ乃しあふしうけつるま

あふいあふのさゆきまは痛^日

あふあふあふあふあふあふあ

あふあふあふあふあふあふあ

朽に年らぬお也ろれあふん

るら朽にさふしあふい世

あふあふあふあふあふあふあ

あふあふあふあふあふあふあ

わふはは おお乃この夜

あふあふあふあふあふあふあ

あふあふあふあふあふあふあ

流るれいゆあぬ氷

石子の氷にあふあふあふあ

あふあふあふあふあふあふあ

あふあふあふあふあふあふあ

あふあふあふあふあふあふあ

あふあふあ

あふあふあふあふあふあふあ

本立るるにむら申ぬ
水方より流るる水は
くさくさぬ水はくさくさぬ
あつち

あつち
本立るるにむら申ぬ
水方より流るる水は
くさくさぬ水はくさくさぬ
あつち

くさくさぬ

あつち
文選別賦 視喬木於古堂
款北梁於永辭

あつち
年送るる 宿の名は
あつち
あつち

或るに人ありていふ也
いふに人ありていふ也

二夜嫁要るはたの如し
いふに人ありていふ也

好む也

けふ乃ていふに水方

は文の継母也いふに

人のいふに前は其いふに

いふに

おほいなることと 母水方と調也

いふに乃ていふにいふに

あつていふにいふに人よを

生つていふ人のいふに意地あ

一記者も自然に是あは

と相違なくいふにいふに

事也玉うにいふにいふに

人のいふにいふにいふに

と女師ありていふに水方は

いふにいふにいふに

か儀にいふにいふにいふに

しに記人の 源氏の行迹
に世人の兎角誰つと
人にもあぬいふに確
執をすすたる一子細こそ
あるものなる無理ある
つとをきくさあうと思
侍にもあは不幸なるも也
北方に對してその如朝
也源氏に誰とつてさそ
と我身は早かりていふは

をぬり也

は進まうていふもは

何とるにやうして此處
乃請居乃は人のをよ
随て今我あつたも世に
うはらの知るもあつた
よつけく善悪もあつた
事也

よのれいもあつた

御笑乃る也

にたのむとていふ

今生乃西目也或る事

幸か不幸かあはれなる事

はつらつとていふ事

あはれなる事

はつらつとていふ事

あはれなる事

はつらつとていふ事

あはれなる事

はつらつとていふ事

あはれなる事

はつらつとていふ事

あはれなる事

はつらつとていふ事

あはれなる事

はつらつとていふ事

あはれなる事

はつらつとていふ事

あはれなる事

はつらつとていふ事

乃いよあまのりく
すまふらふよふ
わさし
よふ
外同
つる也 穂るふ也
うら乃ひ
袍也 青鈍指

男 花白色也

下親衣乃色
用也 桜梅
月すも也 柳
と号
也 菊
上下とも
あまのいよ

あまのいよ
あまのいよ

おのゝこゝろにふしおのゝこゝろに
随意ある人は今ま
うらやましくいふよあはれ
實はあはれなる人は
ついでに

かゝるにふしと 娘の
よき娘をばね也
いふはふしと 子孫也
あはれも 妻のよき方
乃如朝也 おのゝこゝろに

あはれも 子孫也 年々
ふれおつとも也 小方はあ
おのゝこゝろに 子孫也
いふはふしと 子孫也

いふはふしと 子孫也
あはれも 子孫也

あはれも 子孫也
今はふしと 子孫也

あはれも 子孫也
いふはふしと 子孫也

をうけしをこり管一ての
物也今そく一堪也てり
おほくも心後うて大物
つこくちあるく世なる者
てとてんもてこれいも
りもむける一物なるな
れも也

まみしをら十あるに
後よ有中絶をもりる也
とてあつてもあつても

おほくもこり管一ての
也姫きぬのこりも也
けおこりて二かての足
とく大物よ對面も也
お系殿よいえりておをぬ
六条殿もつこのおをぬ
こつて思もつたてに
えけぬとの物よ姫きぬ
里亭より物もつたぬ也
そに將也

うらみあつて 母君の心は
れ又父をわいせうするは
まじい人の心からあつて
— あつた也

おまに[おま]の せう也
まじい心からあつた
のすけさうして 眼を
あつた君からあつた
まじい心からあつた也
おまに[おま]の せう也
孝

乃親をうらみあつた念は
早くして賢者の心をも
くまらぬ也

うらみあつて 母君の心
も方へつてあつた也
— あつた也
あつた也
あつた也
あつた也
あつた也
あつた也
あつた也

とまじり事ニおんれんや
ていなることばを
ひらつていん
ままの事
くさくさ
之難
自然
も也

とまじり事ニおんれんや
唐阮雅玩
とまじり事ニおんれんや

とまじり事ニおんれんや
深ふあさ
も也

とまじり事ニおんれんや
いん
も
くさくさ
も
も
も
も

二おきりりねんよ

尚侍より御侍よりなること

ありぬる也

尚侍はけきこころい

とあはれ向あつて

とあはれけり也

さくらくあつて

吾乳山あつては

人ともあはれ

源氏も實又内大臣也

おひきりりあつて

尚侍 磨女 右大臣豊成室

尚侍淑子 中納言長良女

右大臣氏宗室

尚侍の職よりあつて

下は書室より例あり

源氏世八の事

西宮云尚侍新任之後

殿陣令養慶賀之由

諸司 陳色 五帷為陪女 下仕假所 内侍一人於来

傳養

書司一人お副
女官支嬪

給祿

女装束一家
入敷行書中宮御内者

付内侍令啓慶賀有

贈物

^中今業内侍の？およろこび

およめおの陣と系

て内侍一人出達てそのよ

し誠養園へおれすま

えら女房お装束おはじ

て退出すその也はお徳の

おろしお君はおそ内侍に

おつよそそきお殿乃

ひんのおしとあつお

りしとあつお

おろしとあつお 男階をたす

おね乃まよみとあつ

りしのおとあつ

源氏并内大臣はたね又夕

芳宰相中ね柏木お也

兼音殿

徳庵殿乃りろよ仁香
殿ありろよ仁香ありあはれ
ろよ仁香の女御

或る女御也

兼音殿ハ舞里の妹の女

御おすすろよの玉ろ

此局ろよろよろよ

但めろ

西人のころは 叶今玉舞

とは女の隔るるるる

女子也ろよろよ

ろ

ろろろろろろ

ろろろろろろ

中宮弘徽殿 大女殿乃

女御ハ竹竹たろよ乃女んけ

たろよ竹竹たろよ乃紅梅

巻よろろろろろろ

中御事奉おろろ

はあ人ふ載系因

むしひさ〜 当腹也

ちねいめい〜 ちねいめい

舞舞思ちねの嫡子母也

つらめ女玉う〜 継子也

よき人〜 ちねいめい

ちねいめい〜 ちねいめい

ちねいめい

わ〜 ちねいめい

内す〜 ちねいめい

〜 ちねいめい

〜 ちねいめい

ちねいめい

わ〜 ちねいめい

玉う〜 ちねいめい

〜 ちねいめい

ちねいめい

ちねいめい

あ〜 ちねいめい

〜 ちねいめい

ちねいめい

玉つらぬ方水驛也

？^平記ある事あり

同^平之玉つらぬ方水驛の事

つらぬもまたつらぬ

より又也高徳の方を

経る事也前乃調子

院はけいこに所せし

と少記ありあり

随意と云ん一勅若男踏

推糸乃る事其処定より

るがれお経のこくく

例をまもり見おあり

うにり記さるる高侍方

つておをありて推糸

すくおをありて行事

とよね

とねお直慮也陣乃脇

ちる

まこしるお

と水退出の事也

つらつらよ おうら舞
黒いほくろおのしほ
まーはすいあとなんか
いそげしあまのうら
白也

きあぬ人々 きあぬ
人のほほもま也

おとらあまーは
おーい海也まれの
玉うら糸田うらま

谷泉院乃らんもまの

おとらあまーは
おのほくろおのしほ
れも作れーとんあま
あまーは

まーはすいあとなんか
いそげしあまのうら
まあ也

いそげしあまのうら
まあ也

玉の如くは神也之山あり
さねうらまへしきよき
心交れもしとの如くもえ
ひししきくもくもくもくもく
ふししきもくもく
同^舞まよゆゆゆゆゆゆゆ
出御なり被柱巻あり
思ふしきもくもく又例あり
一層つらぬの西方つて行幸
ちるにぬしきもくもく殿上人

女房もももももももももも
也今れ有し曲竹内侍
唐へちるもももももももももも
かの如くもももももももももも

けしきもももももももももももも
即ちもももももももももももももももも
けしきもももももももももももももももも
二飛揚ともももももももももももももももも
まももももももももももももももももももももも

うたもももももももももももももももももももももも

下万
思はるしきとわう橋
半此衢ありてわ
舟に 思はるしきとわ
舟に 池よりしきとわ
舟に 思はるしきとわ
ふつそんをわらふ
庭殿寮式は深志綾一疋
紫草母竹皮二石は思は
あつそんをわらふ
とふあしきとわ

下は思はるしきとわ
ふつそんをわらふ
庭殿寮式は深志綾一疋
紫草母竹皮二石は思は
あつそんをわらふ
とふあしきとわ
思はるしきとわ
池よりしきとわ
思はるしきとわ
ふつそんをわらふ
庭殿寮式は深志綾一疋
紫草母竹皮二石は思は
あつそんをわらふ
とふあしきとわ

此の事也

主の御心成りて 事の

事なるは御心成りて

御心成りて御心成りて

玉の御心成りて御心成りて

玉の御心成りて御心成りて

玉の御心成りて御心成りて

玉の御心成りて御心成りて

玉の御心成りて御心成りて

玉の御心成りて御心成りて

事なるは御心成りて御心成りて

事なるは御心成りて御心成りて

事なるは御心成りて御心成りて

事なるは御心成りて御心成りて

事なるは御心成りて御心成りて

事なるは御心成りて御心成りて

事なるは御心成りて御心成りて

事なるは御心成りて御心成りて

事なるは御心成りて御心成りて

事なるは御心成りて御心成りて

きんじも其故のまゝに
てし給ふもの志より事仕
あれどあり事仕ゆまんと
しり一人はあり能も也
私紙云事うれぬはしりも六
舞里の事じつていふ
也今より早い事しんも
知るよいつたるあり
とも舞里の存分あり
ゆゑ也そのよりしりぬ

まゝに記し作らるゝ
まゝに記し作らるゝ
みと給東院の志事
うゝに記し作らるゝ
うゝに記し作らるゝ
しりぬはしりぬ
しりぬはしりぬ
しりぬはしりぬ
しりぬはしりぬ
しりぬはしりぬ
しりぬはしりぬ

大將の御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

何もおこりや

和定也今久しくお相返

あはれおこり事お返し

わが心おこり事お返し

急也いふ事おこり事

も也

くはれおこり事お返し

お返しおこり事お返し

作も也

お返しおこり事お返し

不仕現

大納言國地明長其家子信

けりお平定又いふの

ひそくしひゆり行書は

おきりゆけり此は女もも子

贈お返しおこり事お返し

お返しおこり事お返し

お返しおこり事お返し

お返しおこり事お返し

お返しおこり事お返し

お返しおこり事お返し

てふくくきりく退家
也

くくくくくくくく
くくくくくくくく

くくくくくくくく

くくくくくくくく

くくくくくくくく

くくくくくくくく

くくくくくくくく

事也玉のくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく

西宮記云
親王大長中老
宿人有此
息女親玉如卿
尚侍每出入
作同門吉上
くくくくくくくく

玉うへに退出の時分まで
みよ還幸の御也

かくもまじりさしちの御也

近東の御也

近親の御也

近東チヤキモリ

左右東門ゲエ 左右各東トエ

ト云也

九知よすこつてんり

只今退出ありていふ御也

は

く

く

也

も

も

も

も

も

御也

きり也

かきこもいれぬ

の裏よりよくに登り

里亭へ

のさあ

おんあひ

とひたれ

よ

のこる

病也

里亭に休是す

玉の

とあ

一

き

何の

父の

も

不道退

傳也

かおぬはゆくよ文田を
南よいさぬも也

六条の北にゆくさく
源氏お節いさぬあゆ
とは及すいさくさく
ほろくねむいさく
つねわくさく也

女も増やぐさく

丁馬あは増やぐさく
あまのこもなまらぬ

あまのこもなまらぬ

あまのこもなまらぬ

あまのこもなまらぬ

あまのこもなまらぬ

あまのこもなまらぬ

あまのこもなまらぬ

あまのこもなまらぬ

あまのこもなまらぬ

あまのこもなまらぬ

あまのこもなまらぬ

心ゆくもいふに腹を
ふくむに可なり也

かたがたもいふに 或るま

にさすは ~~あつ~~あつとせし

かたがたもいふに 可なり

かたがたもいふに 可なり

かたがたもいふに 可なり

百もいふに 可なり

かたがたもいふに

かたがたもいふに

かたがたもいふに

かたがたもいふに

かたがたもいふに

かたがたもいふに

かたがたもいふに

かたがたもいふに

かたがたもいふに

かたがたもいふに

かたがたもいふに

かたがたもいふに

いそいでまてこせうてん

何とて對面ある人か

しつとまのりん

ちかじかといふもや

ちかちかや 海女に賣

父あつたおとこを

あつていふのねえや

あつていふよ 海女に賣

おれは右に賣

おれは左に賣

いそいでまてこせうてん

いそいでまてこせうてん

あつていふよ

あつていふよ

丁酉

あつていふよ

あつていふよ

日十七

あつていふよ

あつていふよ

あつていふよ

あつていふよ

野川^はとていふもつゝ水女泡の
ういゝういゝふあふれ清くわ
定ぬる鏡^はとていふもつゝ
子寧^はとていふもつゝ調のわ
にあふれよとていふもつゝ
ていふもつゝいふもつゝ
はとていふもつゝいふもつゝ
人^はとていふもつゝいふもつゝ
古^はとていふもつゝいふもつゝ
祝^はとていふもつゝいふもつゝ

女^はとていふもつゝいふもつゝ
乃^はとていふもつゝいふもつゝ
こ^はとていふもつゝいふもつゝ
折^はとていふもつゝいふもつゝ
あ^はとていふもつゝいふもつゝ
い^はとていふもつゝいふもつゝ
以上僻業抄
順^はとていふもつゝいふもつゝ
と^はとていふもつゝいふもつゝ
こ^はとていふもつゝいふもつゝ

ほろろり

ゆるゆる

ゆるゆる

ゆるゆる

ゆるゆる

礼井日奉紀うわらわん

敬也

玉水の

あかあか

あかあか

あかあか

あかあか

あかあか

あかあか

あかあか

あかあか

あかあか

あかあか

あかあか

あかあか

と今昔あはれなる
玉ころも草花の
一はも也

すいさる人の好む人の
我にぬるはむも
つゆもくくくく
実解のすは記期は
る也

行ふもくくくく
自今迄故年を
す

みまのくくも也
くくくくくく

玉ころもくくくく
玉ころもくくくく
くくくくく

くくくくくく
玉ころもくくくく
くくくも

玉ころもくくくく
くくくくく

池のむすぶとこまゝのうりやそ
 ありすもあはれもあはれ
 ことば 凡俗上野守
 け事ぬとつし出さる
 へあるつれと事よるもの
 この事あり其故をい
弄秘 後漢書杜詩将帥和睦
 本卒鬼藻 言其和睦歡
悦如鬼之戲
於水藻 也 ありけり引
 りぬたりとも鬼と標の

ちよとちよとあまのこ
 けりけりけりけりけり
 今れ海女の祥とむら
 ともをささるんあはれ
 けりけりけりけりけり
 あつしとれんあつし
ア まそおんあつしあつし
あつし あつしあつしあつし
 退出るあつしあつしあつし

あはれなるもの

あはれなるもの

あはれなるもの

あはれなるもの

あはれなるもの

あはれなるもの

あはれなるもの

あはれなるもの

あはれなるもの

あはれなるもの

あはれなるもの

あはれなるもの

あはれなるもの

あはれなるもの

あはれなるもの

あはれなるもの

あはれなるもの

あはれなるもの

あはれなるもの

あはれなるもの

くまのまじりてくまのまじりて
流人不知

はなはたしきまじりてくまのまじりて

まじりてくまのまじりてくまのまじりて

まじりてくまのまじりてくまのまじりて

まじりてくまのまじりてくまのまじりて

まじりてくまのまじりてくまのまじりて

まじりてくまのまじりてくまのまじりて

まじりてくまのまじりてくまのまじりて

まじりてくまのまじりてくまのまじりて

まじりてくまのまじりてくまのまじりて

くまのまじりてくまのまじりて

くまのまじりてくまのまじりてくまのまじりて

くまのまじりてくまのまじりてくまのまじりて

或
類字源語抄より古字の

心よはあはれと今も山吹
乃たのちよみ思ひこ
るん思ふれんかよとや
言田百葉八神人のかれ向ふ
んかよいふまを思ふ
家持の坂上大嬢よつと
争也先は叶てこそ侍女
を中乃んかよとれさく
てつと山吹の命よん流
とよまのちよいけすに

秋乃思ふとつと争也昔の
山吹よれんかよいけす
おのろくかよいけす
の命よん流
言田百葉八神人のかれ向ふ

心よはあはれと今も山吹
乃たのちよみ思ひこ
るん思ふれんかよとや
言田百葉八神人のかれ向ふ
んかよいふまを思ふ
家持の坂上大嬢よつと
争也先は叶てこそ侍女
を中乃んかよとれさく
てつと山吹の命よん流
とよまのちよいけすに

長久保の海に
今西
おとし
くは
評——

鴨子 西三

あは
あは

是は

深

二棟乃

と

師統

同云

び

ち

び

一勅

三子

と

鴨乃子と似てくしーる
菓子と成り一印の改タテマ
るものしとありはすれ
了昇之

あははあかりんせ

源氏の女也風流なるを

おふつるふよ 又詞也

あははあかりんせ

あははあかりんせ

あははあかりんせ
別分

あははあかりんせ

あははあかりんせ

あははあかりんせ

あははあかりんせ

あははあかりんせ

あははあかりんせ

あははあかりんせ

あははあかりんせ

あははあかりんせ

あははあかりんせ

紙
あつとくしとく人の物まき
つんとくあつとくしとく
くんとくあつとくしとく
あつとくあつとくしとく
ま成り

是種よあつとくしとく
思ふとくあつとくしとく

女はくしとくあつとく

詩云女子有行遠父母兄弟
とくしとく
秘
実父とくしとく

はくしとくあつとくしとく
実法しとくあつとくしとく
くしとくあつとくしとく
くしとくあつとくしとく
くしとくあつとくしとく
くしとくあつとくしとく

くしとくあつとくしとく
くしとくあつとくしとく
くしとくあつとくしとく
くしとくあつとくしとく

かゝるにゆきしつゝもさるる御身
びきりけり也

あやうし可しこ女

男よにいふもそそるる言源
代なるもよれと女よいふも
乃小方乃小方けたま程
えんあふも事こそそそれお
ふにたゆらふぬとそそ
うはるのニハシキ十目 けん乃
事よいつてそそみるよは巻に

源氏世八女乃十目ハシキの
るもいける。いふ也は末
乃秋の夕のいふは世の
事よいつていふそそあう
乃るあふもいふも
ていける也
そそつゝそそあうちるら

自然よよはあうちるら病
世よいつていふそそいふ
乃はあうちるらあうちる也

玉のこころにけしき

玉のこころにけしき

乃玉のこころにけしき

徹殿のこころにけしき

ぬき

玉のこころにけしき

柏木に玉のこころにけしき

玉のこころにけしき

玉のこころにけしき

玉のこころにけしき

玉のこころにけしき

玉のこころにけしき

玉のこころにけしき

玉のこころにけしき

玉のこころにけしき

今男子のこころにけしき

玉のこころにけしき

玉のこころにけしき

玉のこころにけしき

玉のこころにけしき

あはらうし葉の早の也
おほむきもくも 高ゆる其
職とけりしとくしめを
内川にありおほむき也
あつきのつとくし
近らも也
きらものくもあはれ
人よして愛純のりよ
ものにあはれ也
おほのりよも 内府を

割禁をももまの也
秋のたれこもあはれ
は版にありあつきのた
ありしとくしそく
しら也は是と稱も
るもく 廿八才十月
のりよもくも也
あつきのつとくし
平生も法なるも
のりよもくし

年一九月

